

①早稲田大学大学院 佐藤大朗

「裴松之『三国志注』受容——清代前期の李光地を題材に——」

劉宋文帝の勅命で作られた裴松之『三国志注』（以下、裴注）は、西晋陳寿の『三国志』の注であり、①補闕・②備異・③懲妄・④論辯という四つの体例をもつ（「上三国志注」）。従来裴注はドイツのランケを鼻祖とする近代歴史学に通じるとされてきた。裴注は「実際にどうであったか」を追求した史料批判である、という指摘である。これに対し、裴注の時代性に着目して近代歴史学との同一視を戒めた研究もある。いずれにせよ、実際のできごとを追求した裴注が中国の史学における到達点の一つであるという評価は揺らがないであろう。それでは、裴注の成果は後の中国の史学においてどのように受容されたのであろうか。本報告では、清代前期の李光地が『三国志』を論じた文を裴注と比較し、前近代中国の史学の様相を検討したい。

明代までに、裴注が採録した豊富な異聞を土壌として多くの三国志の逸話が育まれ、虚構を含む『三国演義』が成立するに至った。明清交替の後、康熙帝のもとで高官となった李光地（号は榕村、通称は安溪先生）も三国志に親しんでいる。彼は諸葛亮を絶賛したが、これには政治的な意図もあり、司馬徽が諸葛亮評に用いた「時務」という語を重ねて引用して政敵を攻撃した。『資治通鑑綱目』を踏まえて蜀漢を支持し、劉備・諸葛亮・趙雲ら蜀漢の人々を英雄や賢者として称賛した。李光地は、裴注が虚妄であるとして退けた『家伝』『別伝』をむしろ歓迎し、『三国志』趙雲伝本文が同注引『趙雲別伝』に比べて物足りないとかえ論じている。李光地には史料批判に通ずる方法論は見られず、人物やできごとを縦横に談じるばかりである。

李光地が書き込みをした『三国志』版本は、彼が推挙した何焯（通称は義門先生）に継承され、校勘による善本の確定、『義門読書記』に載せる批校の土台となり、清朝考証学の基礎が形成された。何焯もまた裴松之注を踏襲していない。裴松之の成果は近代歴史学に通じるものであったが、中国の史学史において有力な後継者を持たなかったことが清朝前期の事例から確認されよう。

②早稲田大学非常勤講師 伊藤涼

「王弼の政治思想と郭象の政治思想」

王弼（226-249年）・郭象（252-312年）は、いずれも魏晋期に流行した「玄学」の中心的人物である。それぞれの主な著作としては、王弼に『周易』注・『老子』注、郭象に『莊子』注があり、いずれも各書物の代表的な注釈となっている。先行研究では、物事の本質や深層を探求するという「玄学」の学問的特徴によって、彼らの形而上学的な議論について言及されることが多く、とくに日本においては彼らの政治思想について言及するものはほとんどない。しかし、彼らはいずれも「聖人が無為によって万物を治める」という世界を構想しており、それによって、なぜ“何もしない”ことによって万物を治められるのかに答える理論を多く形成している。本報告は、そうした王弼・郭象の政治思想に関する理

論をそれぞれ検討していくものである。具体的に、王弼の政治思想については、そもそも『老子』に統治理論が多く含まれているため、王弼がそれをどのように受容・発展させているのかについて検討する。また、郭象の政治思想については、『莊子』が『老子』ほどには統治理論を有していないため、それでも郭象には多くの統治理論が見えることを確認したうえで、それがどのような理論であるのかを検討する。王弼・郭象の政治思想をまとめて確認するのは、結論的に言えば、彼らの政治思想に継承・発展関係があるためであり、それを具体的に確認していくことが本発表の主な目的である。その上で、そもそもなぜ彼らにそのような政治思想が見えるのかについても考察を行うことにしたい。

③拓殖大学非常勤講師 王旭東

「鬼怪を食べる話」

古代中国の文献には、妖怪や奇怪な生物を食べるという記述が数多く見える。そのうち善神が悪鬼を食べるというタイプは、辟邪思想に基づくものとされ、わずかに研究が行われているが、その他は殆ど研究の対象とされていない。筆者は『山海経』、六朝・唐代の小説など宋代までの伝世文献に加え、出土資料や敦煌残卷よりこの種の話を集集し、検討を加えた。その結果、中国の鬼怪を食べる話には、善神が悪鬼を食べて退治するもののほか、二つの類型を見出すことができた。一つは人間が、遠隔の地に棲む怪物のように、世にもまれな存在を食べることにより、薬効や特殊な能力を獲得するもの、もう一つは、人間の周囲にいて害を為す妖怪を、人間自身が食べて退治するものである。本発表は、各類型の具体像を示し、食べられる異物や記載する書物の違いに着目して、三類型を分析し、比較考察する。また六朝まで、三類型は明確に区別されていたが、唐代になると、ある者は姿を消し、ある者は他の類型と融合し、大きな変貌を遂げた。唐以後に起こった変化についても概略を示したい。

④京都外国語大学名誉教授 福原啓郎

「六朝時代の死生観に関する一考察—鎮墓文と墓誌の比較を中心に—」

六朝時代の死生観(といっても、主に来世観、すなわち死後の世界や死者に対する考え方であるが)は、漢代までの、「魂氣帰於天、形魄帰於地」(『礼記』郊特牲)という魂魄観を有するものの、「未知生、焉知死」(『論語』先進)というように死後の世界を積極的には提示しない、あたかも死生観を放棄しているような儒教の死生観、『楚辞』に見える昇天(昇仙)の死生観などの混在の状況から独自の死生観をもつ仏教による変容への過渡期の死生観といえよう。その六朝時代の死生観に対して、近年、詩賦、説話など様々な史料を用いての分析が試みられている。その一環として、ともに死者を葬る墳墓の墓室内に安置された死者(被葬者、墓主)の記録である鎮墓文(鎮墓瓶の銘文)と墓誌に注目し、両者の比較を軸にそこに窺われる死生観について考察したい。

鎮墓文と墓誌の両者はともに死者の冥福を祈る点では共通するものの、たとえば、鎮墓文中の「死者自受殃咎」の決まり文句が端的に示す、残された生者の死者に対する畏怖から導かれた死者の排除の論理と墓誌の残された生者の死者に対する追慕の念は真逆に相違する。それは何故であろうか。鎮墓文と墓誌の両者の時期的な先後の差(鎮墓文が後漢から

始まるのに対して、墓誌は西晋)、地域的な差(五胡十六国時代であるが、河西地方では鎮墓文が敦煌であるのに対して墓誌は高昌)、階層的な差(鎮墓文が比較的には低い階層であるのに対して、墓誌は高い階層)、墓室内での役割や配置の差などが想定される。

その中であって、両者の歴史的特質を考えるならば、鎮墓文が死者に対して畏怖するという古来よりの死生観と初期道教が結びついた産物であるに対して、墓誌の追慕の念は儒教が説く父母に対する「孝」と魏晉時代に新たに出現した文学作品と通底するエートスが結合した産物であることが両者の相違の最大の理由ではないか。そして、後者の墓誌の優位の下、仏教の浸透による死生観の変容以後の儒仏道三教の共存の中で、鎮墓文が衰退、消滅していくのに対して、墓誌は定型化するものの、むしろ定着するのであろう。